

## 第六十二回 桐の花賞

くどう れいん (岩手)

右に贈ることを決定した

令和七年五月

コスモス短歌会

くどうれいんさんの作品について

くどうれいんさんは、短歌はもちろん、小説、エッセイ、絵本等々幅広いジャンルで活躍する作家である。二〇二二年、『氷柱の声』で第一六五回芥川賞候補にもなった。盛岡三高在学中に短歌甲子園で団体優勝を果たし、それを契機としてコスモス短歌会に入会。二〇二二年には第一歌集『水中で口笛』を出版するなど意欲的に活動している。

くどうさんの歌の特徴としてまずあげられるのは、定型を守りつつ定型に縛られない自在なリズムだろう。

○ポストどこですかと尋ねられここはポスト少なきわれのふるさと  
この歌は意味で区切ろうとすると、定型をはずれているような印象を与える。しかし一首としては三十一音に収まるのであり、「ポストどこですかと尋ねられここは／ポスト少なき／われのふるさと」と、上の句に二つの句またがりを用いた歌として読める。作者の心にじっくりくる言葉の連なりが歌になるとき、独自の口語的リズムが生まれるのだろう。

また、その歌の魅力は、気付きの面白さと実在性にある。

○絆創膏売り場思ったより広くわたしの傷をしばらく選ぶ

○めずらしく黄色のワンピースを買った わたし春から雷になる  
一首目の、絆創膏を選ぶというのは、自分が負った傷を意識することだという視点の転換。二首目の、「黄色」から「雷」を導く発想の意外性。いずれも読者をハッとさせてくれる。

○もしかしてわたし田舎者と聞えば夫は切なそうに頷く

○人妻になったと思う冷凍の骨付き肉を三本掴み

○結婚をすれば祖父母が倍になり義祖母は傘をコウモリと呼ぶ  
ちよっとした違いに戸惑ったり喜んだり、毎日が発見の宝庫である。

くどうさんは、日常の中の微細な何かを捉えるアンテナを持っているのだろう。言葉に立ち止まり、〈空気〉に立ち止まる。多忙を極める生活のようだが、くどうさんはいま懸命に歌作りに取り組んでいるという。今後その世界がどのような変容を見せるのか楽しみである。

《選考過程》

選者団に推薦を求め、高野・影山・桑原・狩野・小島ゆ・木畑・大松・田宮・津金・福士・藤野・風間・田中・水上比・鈴木竹・原賀・水上美・大野・松尾・鈴木千・小島な・

小田部・斉藤の各氏から回答があった。  
くどうれいん29点、小田沙也加19点、清水美里16点、宮梓一13点、中村恵9点、山添聖子6点、岩館澄江6点、松下誠一3点、谷川恵1点。

この数字をもとに二月十五日、編集部で検討し、得点の最も多いくどうれいんの受賞が決定した。

作品抄

絆創膏売り場思ったより広くわたしの傷をしばらく選ぶ

ゆるしてとあなたは月の下で言うゆるされそうにないときにだけ

臨終の犬の臉を手で閉じてわたしはなにをいまとじてるの

ふりむけば呼びましたかと犬は来た　ふりむけばただ冬のまぶしさ

右ひじに右巻きをつむじがあつてわたしの犬は聡明だった

できるだけ大きく虹を描くように黒板消しで消す過去分詞

大福に黒豆透けるように嘘いくつかあつてどれもちいさい

歪むようにおっとり朽ちる切り花のラナンキュラスの窪みの暗さ

捨てようとして持つて知るスプーンの柄に描かれた立派な葡萄

いるかにはいるかのほんとの挨拶があるはずなのに手を振ってくれた

めずらしく黄色のワンピースを買った　わたし春から雷になる

灰皿の白さ重なる居酒屋に三人いれば三人の恋

ポストどこですかと尋ねられここはポスト少なきわれのふるさと

封筒を青か黄色か迷うときそれは来世のくちばしの色

外灯に柳揺れば影揺れてこれじゃあわたし悪人みたい

あなたには花束にない花ばかり教えたくなる　あ、ねぎぼうず

たまねぎを三つ抱えたまま会ってそれを黙ったまままで別れた



---

---

レタスにはレタスのかなしみもあるか折り重なった空気ごと切る  
〈東京〉はこの国にいくつでもあると思う博多の駅大きくて  
もしかしてわたし田舎者と聞えば夫は切なそうに頷く  
荷作りがどんだん上手くなったからいつでも逃げられる でもどこへ  
頼ってくれたらと言いつつ頼られたところで二本しかないこの手  
わたしもう、ずっとその先にいるんだよと言ってはいけないことだけ確か  
強くなるほど孤独だよ 鳩時計は暗い朝焼けでも飛び出して  
結婚をすれば祖父母が倍になり義祖母は傘をコウモリと呼ぶ  
山形にくだもの畑ばかりあり楽器倉庫のような静けさ  
人妻になったと思う冷凍の骨付き肉を三本掴み  
わたし、わたしに厳しいのかしら 雑炊ののちの鍋底洗う  
満月が徐々に大きくなってきたあなたとわたしだけ気付く夢  
いじわるとわたしを褒める手紙には紙香水が挟まっていた

## 感想

とにかく賞と縁のない人生である。ようやくはじめて一位になったのは盛岡短歌甲子園。そこで特別審査員を務めていたのが小島ゆかりさんだった。それから賞を取れない日々は続き、いつも惜しいところまでいつて期待しては打ち碎かれる。後輩歌人の新人賞を祝うために授賞式へ行き「どうして賞が取れないんでしょう」とついばやいたわたしにゆかりさんは「賞はその人に必要なときに貰えるように

なっているもの、いまのれいんちゃんは賞がなくてもう十分大丈夫だってことじゃない」と励ましてくださって涙が出た。だから思う。いま、わたしには桐の花賞が必要でした。本当にうれしいです。

## 略歴

一九九四年 岩手県盛岡市生まれ  
二〇一七年 コスモス短歌会入会  
二〇二一年 第一六五回芥川賞候補となる  
二〇二二年 専業作家として独立

## 第六十二回 桐の花賞選考資料抜粋

1位 くどうれいん

発想に大胆な詩情がある。負の感情を正に転換させる力を秘めていて歌に厚みがある。今後、も持続的な作歌を望みたい。

2位 宮 梓一

第一子を得て、軽やかな口語の日常詠から、命をみつめる深い歌に変貌しつつある。今後、更に期待したい。

3位 小田沙也加

発想がゆたかで、読者を楽しませる歌がいい。日常の中に詩を見つめる才能を感じる。入会後は浅いが有望新人。

1位 くどうれいん

日常の中から詩を汲み取り、巧みに言葉を探り、コンスタンに一定レベルの歌を作る。結婚してから年月が浅く、フレッシュな生活感が出ている。

2位 宮 梓一

三十代後半で初めて父になった。子どもを得た父としての感慨がみずみずしくて、ほほえま

A・

しい。歌柄が明るくて、おおらか。素材の捉えどころがいい。

3位 小田沙也加

理系の大学院生か。二十代前半らしいストレートで、パワフルな調べが魅力。折に触れて率直かつ微妙な心理も覗く。今後の作品が楽しみだ。

1位 くどうれいん

言葉のもつ響きや音調を感受し、自然に歌のかたちを整えている印象がある。しかし散文的ではなく、詩の世界につながる言葉が用いられている。

2位 中村 恵

すでにその一集に所属している。表現と向き合う意欲が感じられ、今年度はオノマトペや比喩に独自性がみられた。

3位 宮 梓一

奇を衒わない素直な詠み方で作者の優しさや明るさが歌に映し出されている。視点を変えて対象を見る柔軟さが備わる。

1位 くどうれいん

D・

### 推薦作品抄

小田沙也加 \*

白菜をざくざく切って合いの手は頼むよお隣の洗濯機  
地底湖が陽を浴びている 先生に短歌を見せた飲み会のこと  
学会の予定を書き入れたときに斜めが揃う手帳のオセロ  
がむしやらにやるしかないと言われた日 三割大きい歩幅で帰る  
地下鉄の階段しずかに降りゆけば呼吸が変わる深海魚になる  
青春はいつまで青春なのだろう夜の新鮮線を手を振る  
葉と花に意思があるなら葉の方がせっかちだろう桜の木たち  
玄関に飾ったドライフラワーが不死身でうれしい 一人を暮らす  
就職か博士か訊かれてばかりいて最近では言霊のこと考える  
横揺れに時計は落ちて寒かった夕の身体を湿らせる汗  
伝聞で知るくらいならもういいや桃の果汁がフォークを伝う  
霜焼けの指広げればスリッパが膨れる腹式呼吸のように  
曖昧な関係性がまた増えて手の振り方を迷ってしまう  
千里眼なんて持たずに生きてきた秋以降埋まらない計画書  
道中に三つ火山が見えるのもこの出張の試練と思う

本年度桐の花賞の選考のもととなった推薦文と作品の一部を、ここに掲載する。推薦作品抄は、推薦者の挙げた作品の中から編集部が適宜抄出したが、推薦の多い作品を初めのほうに掲載してある。

なにげない行為や出来事から卓拔な比喩や映像をおとして、まったく新しい世界を展開させる感覚の特にすぐれた作品群である。

2位 小田沙也加

現代における生活を描写しながらたしか個人を感じさせる作品群である。ドラマのなかのひとりの女性のある日ある時の姿を想起させる。

3位 山添 聖子

入会以来、優れた作品を発表しつつづけている。自然や家族といった対象をやさしく観察して身近に引き寄せる感覚に優れている作品群である。

E・

1位 くだりれいん

発想もリズムも新鮮で、短歌と詩の境界が薄れてゆくことを感じさせる作品群に圧倒された。コスモスの新風の最前線に立つ一人である。

2位 宮 梓一

父親になる自分自身とその生活をコミカルに詠みつつも、生まれてくる子に対する愛情にふれた短歌に魅力を覚えた。新しい父親短歌の誕生である。

3位 岩館 澄江

口語を生かした軽やかなリズムの短歌が印象深い。日々目の前に現れてくる困難を明るい歌のリズムで乗り越えてゆくのだと思ってしまう。

1位 くだりれいん

F・

恵まれた資質による表現力の豊かさに大器の趣きがあり、未知の魅力がある。生活が、そのまま思考へ繋がる自然な詠み口もよい。

2位 山添 聖子

家族詠にも詩への飛躍が見られるが、飛躍の跡を表立てない静やかな作品質だ。入会以来の全回特選の結果が、作者の力量を示しているだろう。

3位 小田沙也加

就職か学問かの岐路に立つ二十三歳。世の中との格闘が始まって、作歌にもバイヤスがかかっている筈だが、その日々を作者の個性で詠い継いでいる。

G・

1位 くだりれいん

自分の文体を既に持っているやわらかな言葉で綴られる一首には飛躍があり、それが詩として不思議な説得力を持つて立ち上がって来る。

2位 小田沙也加

ありふれた日常から詩が掬い取られ、はっとするような発想がある。表現の背後の物語を想像させる味わい深い作品が魅力。

3位 清水 美里

己を見つめる陰影深い作品が印象的。破調に思える作品も定型が守られ韻律を味方している。苦しみの中でも他者に向けての眼差しが優しい。

H・

1位 くだりれいん

一年間十二回中九回の特選は

五年目の春に私は住んでいて不燃ごみだってもう捨てられるすれ違う誰かの父のポケットにマーブルチョコを見る昼下がり加湿器の音 雨の音 水生じゃないのに眠くなる水の音

清水 美里 \*

天使らに心を持たぬ個体あり空を飛ぶには重すぎるため靴擦れの足からだを乗せ歩くストッキングを早く脱ぎたい手にパンのやわらかさただ心地よい〈夏の終わり〉がいつか知らない側弯が背骨にありて側弯があなたを許せなくて苦しむ

抜けたねじ巻きすぎのねじそうやって君が見ている私の私見えてたり見えなかつたりうまいこと縫つてあつたり塞いだり傷〈汚れてもいい服〉になつてしまつた買ったばかりのスウェットに墨これは花だろかならばいつの日か静かに枯れていくのだからか誰も彼もヘッドセットを身につけて見えないひとと会話している雲呑は小分けにされた脳ゆえ心して吸う数多の記憶

ウォン・カーウアイ好きなんですと言いたくて全部見たけどまだ好きじゃないやわらかく頁のあい折り返し入れ葉紐の色はその著者に似る剪定をされぬ樹であるわたくしの梢の中にヒヨドリ叫ぶ渡り鳥 あなたの国では何という名ですかあなたの国どこですかわたくしのひとさしゆびとなかゆびを寝ぼけてにぎる愛ちようどよし閉じやすい本でありたいです、ばたん。なかみをさらし続けるの嫌

宮 梓一 \*

「セツトなら安くします」とグッピーのつがい特別価格のいのち悠という文字の意味などまだ知らぬ子が十日ほどフライングする終戦の日の黙禱で泣き出した子どもは今日で生後百日まだ誰かわからないけどもう既にふたりぼっちじゃなくなっている

すばらしい。独特な感性で詠まれた歌はとても魅力的だ。甘すぎない新妻の歌はほほえましい。

3位 岩館 澄江  
そこはかないユーモアと温もりを付加して読者を楽しませる巧みがある。観察が細部にまで行き届いていると感じる。言葉遊びをする余裕もある。

2位 宮 梓一  
父親として奮闘する作者の柔軟な心が生み出す歌はとても新鮮である。口語が親しみやすい。

1位 清水 美里  
日常に詩を見出ししている歌に惹かれる。マイナスなことにも目を背けずしっかりと詠み、作者の優しさも感じる歌は魅力的だ。

3位 岩館 澄江  
若者らしい感性で詠む歌は、とても魅力的で、将来性を感じ

2位 中村 恵  
ユーモアと自虐を独自の視点で詠む。言葉選びが柔らかい。歌はしっかりと書いて詩的に良い。

1位 小田沙也加  
若さ溢れる躍動感や心の揺れが繊細にまた大胆に詠まれ魅力的。日常の中の発見にも独自性がある。

1位 清水 美里  
現実の自己と、その自己を見る自己と、自己をめぐる世界との微妙な齟齬がメインテーマだろう。独特の感覚が具体的な物や比喩としてイメージ鮮明に描かれて惹かれるものがある。

2位 中村 恵  
難病を抱える自身を慈しむような詠みに静かな抒情が広がり慰藉が伝わる。

3位 くどうれいん  
日常の切なさや喜びを詠んだ歌には物語がある。読者を楽しませる術を知っている作者。

3位 清水 美里  
心の痛みや思いを繊細に詠む。繊細さゆえに他者に寄せる思いも温かい。

1位 清水 美里  
現代の生き難さに閉じこもらない。家族や夫や恋人の描き方にも、社会への目にも、言葉に対する愛着が感じられ、ひらがなの使い方に作者特有の味わいがあり、魅力的である。

1位 清水 美里  
対象をよく見てそこから引き出される気付きを素直に述べているのがいい。思いがけないところで句まがりを使い定型を守るのがうまい。

2位 岩館 澄江  
現代の生き難さに閉じこもらない。家族や夫や恋人の描き方にも、社会への目にも、言葉に対する愛着が感じられ、ひらがなの使い方に作者特有の味わいがあり、魅力的である。

2位 小田沙也加  
なるほどと思わせる飛躍力のある比喩を生み出す力を感じた。見立ての斡旋に切れ味がある。

3位 宮 梓一  
適切な場の設定が新鮮な発想を生んでいる。

1位 清水 美里  
対象をよく見てそこから引き出される気付きを素直に述べているのがいい。思いがけないところ

3位 宮 梓一  
適切な場の設定が新鮮な発想を生んでいる。

オレンジがだんだん紺を押し上げて深夜を朝に染め上げていく特別な日じゃなくなつた十二月二十三日ケーキを食べるドラえもん道具出してよ赤ちゃんの泣いてるわけがわかる道具をおじさんと母が呼ぶ人いつのまにお父さんではなくなつていた今年こそ通勤しながら初日の出見ないで済ませたかつたけれど意図的に主語を隠したアドバイス 口に残つた玉ねぎの皮また明日職場へ持っていくために弁当箱を静かに洗う哺乳瓶を回し続ける窓の外まだ光るのは土星だろうか嬰兒の頬をつついてるうちにラ王の麵が汁を吸い切る外来が始まつてない病院のスターバックス七時開店

中村 恵 \*

こうすれば早く治ると信じきつて四角い蒲団を四角く使うわがままを言えば真夜中夫が買うコンビニみかん一個百円せろせろとまたせろせろと咳が出て夜が来るのをすこし恐れる四キロの冬瓜を抱く右腕に抱かれなかつた子四年目の秋平穏にみえてとつぜん沸騰す薄い皮膜の張れるミルクはアスファルトの道を侵食する砂よわが足首を掴みし砂よ頭からアキレス腱までいちまいのからだで煮こむたまご雑炊住む人がなくなつて家は毀されてしずかな砂の傾斜地のころ思い出があつてよかつた霜を踏むときにわたしは子どもに還るかたたとと汽車は走りてそののちのしずかな耳に波が聞こえる上野行き列車で撮りし夕空をひらいておりぬ 麦茶が沸いた夏の日の退屈をしのぐ赤色のくすりの殻を壘に詰めては

山添 聖子 \*

オリーブの花降り積もるこの白は暖色に分類される白



子を持つ若い父親の生活感や、さりげない社会批判などが明るく端的に描かれていて楽しい歌である。

1位 山添 聖子

昨年入会し、出詠十回全て特選は快挙。子どもを詠んだ歌、自然を感じる力、言葉への感度の良さなど、今後の活躍が楽しみである。

2位 くだりいん

言葉の斡旋が巧みで、下の句への展開が意表を突く。新婚生活の描き方も個性的。歌を詠み続けて欲しい。

3位 小田沙也加

大学院生ならではの悩みや日常が、独自の視点で捉えられている。発想の飛躍と、それを支える現実のバランスが良い。

1位 松下 誠一

文体と感傷がしなやかに受け入れ合っている。感覚の表出が直感的でテクニカル。

2位 くだりいん

登場人物の多い作品で、自己と他者とのあわりに豊かでチャイミングな目配せがある。

3位 谷川 恵

端正な詩情が魅力。孤絶感のある心と身体質感を通じて、外界を自らと地続きで把握する。

1位 宮 梓一

日々の暮らしの中から掬い上げる歌の種。誠実な詠みぶりが

特徴。新しい命を見つめる嬰兒の歌はみずみずしい。抒情的な作品にも注目したい。

2位 小田沙也加

感覚を的確に表現しようとす意志が伝わる。心を見つめつつも狭い世界にとらわれずに、ありのままを自由に率直に詠む。事象の捉え方が独特で印象深い。

3位 清水 美里

心の葛藤を詠む作品に惹かれる。自問自答のうちに定型に収められる言葉は声。繊細であるゆえに感じてしまうことを真摯に表現している。

1位 中村 恵

平穏に見える日常の中のしんと冷えた感情をさりげなく詠む。自身の身体に対する把握の表現に独自性を感じる。短歌を必要とする作者なのだろう。

2位 小田沙也加

修士課程に在籍する作者。人生の岐路に立つ若者の迷いがさりと詠まれる。読み起こしから、結句へ向かう展開に納得できる飛躍があり、面白い。

3位 清水 美里

精神的なイメージを歌を詠むことで昇華しているようだ。人間の心の深部に果てしなく分け入るような、入れ子型構造の作品が印象的だった。

子の靴はどこかの砂漠とつながっているから今日も砂の湧き出る宿題の途中ソファーに眠る子よプールのあとは少し幼いなまめるき夜の手ざわり ああこれはどこかにオオサンショウウオがいる全力でみかんゼリーを買いに行く熱の子どものリクエストなら「もむない」の語源は『日本書紀』と知る祖母にも伝えなき春彼岸木蓮のつぼみの中であたためた今年の春は明日解ります一枚の木の葉になりて浮かびたり八月の仁淀川のカヤツク

岩館 澄江 \*

象それはやさしい巨人お寺には二頭の象の彫刻がたつ  
汐留のビルのあいまをぬつてゆくわたしも影もまちがっている  
そのリズムならばあけます我々の我々だけのノックのリズム  
繰り返し洗って拭いて翌日にまた使えますわたしのからだ  
目立たないようにくすんだ色を着てちゃんとしている感じの家族  
まひるまにおなかもおまたもおつぷりねむれるいぬをまねしてねむる  
考えることを考えたくなくてまずはちよつとのあいだ黙って

松下 誠一 \*

文面がなんだか泣いている感じ 適当に2月をやりすぎす  
春らしく暖かい日をごま油ひとつを素手に持って帰った  
花びらが自重に落ちてゆく夜の触れずにいるきみの退屈

谷川 恵

私より冷たいひとはあないだらう白壁をべたべたべた触る  
夏風邪をひきつづけたる二ヶ月に増えた気がする争ひごとは  
引き算をしないと歳がわからない 秋の夜にはちやうどいい嘘